



Vol.40

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

シリカブ(メカジキ)



♪シリカブ キンキリ 来い来い♪
シリカブ(メカジキ)のお話を聞かせてくれたおばあちゃんが「シリカブの漁はわからないけど、シリカブキキリ(メカジキ・虫」シロスジコガネ)の歌は子供の頃に歌ったもんだ。夏になると浜で背中に白い筋のある虫が飛ぶんだ。」と歌ってくれた。この歌、本来は砂浜で子供たちがシリカブキキリを捕まえて、♪シリカブ エク エク(メカジキ来い来い)♪ とメカジキの豊漁を歌ったものだったそうですが…、おばあちゃんのは虫の歌でした。

昔は、シリカブキキリが飛びはじめるとシリカブ漁の準備をしたんだって。漁期を知らせる重要な虫だったんだね。暖流に乗って

回遊するメカジキやクジラ、マンボウなどの大型魚の漁は、白老から登別、室蘭、長万部など太平洋岸一帯で盛んにおこなわれていたとのこと。大海に船を漕ぎだし、男たちがレパオブヤキテとよばれる投げ鉚一本で挑む勇猛果敢な漁。白老では昭和初期頃までシリカブの伝統漁がおこなわれていて、送り儀礼や調理法も伝えられているの。

メカジキの大きいものは体長四メートル以上もあり、三百キロを超えるものも。特徴は何といつてもあの長い剣状の吻。下顎の四倍以上の長さがあるんだって。性格は獐猛で船やクジラなどにも突進していくほどというから、シリカブ漁も命がけだよな。

優子さん、シリカブのあの長い吻、攻撃には威力を発揮するけど、ある意味邪魔になると思いませんか？



いえいえ、あれは食料確保の。目の前の魚に吻を叩きつけ、動けなくなつたのをパクリと食べるんですってね。(以前、所ジョージさんのバラエティーで、「へえ、あれで魚を刺すのかと思った」と言ったゲストに所さん、「それじゃ、一生食べられません」って…笑)。しかも単なるヤワな棒じゃないので

も単なるヤワな棒じゃないので



す。船の舵をも通すくらい威力があり「舵木通し」って呼ばれたのが、カジキに転じたとも言われるの。

かつてのアイヌ社会でも、シリカブの吻はハイと呼ばれ、特別の存在だったみたい。平取を流れる沙流川河口の遺跡からは、なんらかの信仰のあとがうかがえるハイが出土しているの。また、流れを臨むハヨピラという切り立った崖は、アイヌに文化を教えた人文神・オキクルミカムイが降臨したとされる伝説の場所だけど、かつて金田一京助博士は、シリカブのことを「角鮫(即ち舵木鮪)」と書き、ハヨピラ(ハイ・オ・ピラ)は、「角鮫の角(口嘴)が頂にある崖」の意味だとしています。しかも実際に「今五十余歳の老夷の父の若年の頃」「うくん、ややこしいけど、だいたい明治維新あたり?」までは、この崖にハイがあったことを聴き取っていることから、ハヨピラのチャシ(一般的には砦)の柵がハイできていたというイメージが生まれたの。もちろん博士は、あくまで伝説としてのけど、シリカブのハイが屹立する崖の上の砦。まるでアニメの世界でしょ。

世界でしょ。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。